

## シェイクスピアとアイロニー

青 木 啓 治

最近シェイクスピアのアイロニーに注目する批評家が増えてきた。これは作者が偉大なアイロニストであることを考えれば当然のことであるが、劇の人物の性格を心理的に追求する批評態度になお行過ぎがみられる現代においては、それを是正する意味でも、これは健全な批評の傾向であるように思われる。劇の人物を距離をおいて眺めるアイロニーの態度は、その人物の心の中に入ってゆく批評態度と相容れないからである。

20世紀のシェイクスピア批評は、A.C. Bradley (1851-1935) の否定あるいは修正の方向に進んできたといつてよい。この批評家を頂点とする心理的リアリズムに基づいた性格中心の批評は、いろんな意味で今世紀のシェイクスピア批評に大きな影響を及ぼしたが、それが劇の解釈に歪みをうみだしてきたことは明らかであろう。この批評の欠陥は、劇の人物が生きた人間のように、作者の手を離れて、完全に自立してゆくところにある。シェイクスピアが最も客観的な作家であつて、性格描写にすぐれていることを否定するものではないが、彼の人物は必ずしも実生活者の心理を反映していないし、その技巧も完全に自然主義的ではないのである。シェイクスピア劇を正しく理解するには、エリザベス時代の舞台のコンヴェンションについて研究すると共に、人物の性格を劇の構成や主題との関連において捉える批評態度が必要であろう。

しかし、心理的リアリズムに基づいた性格中心の批評の欠陥としてもっと注目されなければならないのは、それがシェイクスピアのアイロニーに反応

することができないという点である。‘ironic detachment’ という言葉があるように、アイロニーを感じるためには、離れたところからその対象を眺める必要があるが、人物の性格を心理的に追求する批評態度では、それが不可能だからである。アイロニーがシェイクスピアの用いる重要な劇的效果であることを考えれば、これは大きな欠陥であるといわなければならない。

これまでアイロニーは、多くの学者や批評家達によって研究され、その主な種類や様式が確認され、分類されてきた。そのあいまいな特性のため、アイロニーのあらゆる面を包摂できるような定義を見つけることは困難であるが、J.A. Cuddon の『文学用語辞典』は、これまで認識された殆どのアイロニーの様式が含んでいた共通の特性として、‘The perception or awareness of a discrepancy or incongruity between words and their meanings, or between actions and their results, or between appearance and reality.’<sup>1)</sup>を挙げている。この「言葉とその意味の食い違い」とは、いわゆる verbal irony のことである。人があることを述べながら、その反対のことを意味するという最も単純で一般に用いられているアイロニーの型で、それを聞く相手がその事実を知らない場合に、観客が感じるアイロニーである。次に「行動とその結果の食い違い」であるが、これは劇でいえば、ある人物が自分の目的に向って自信をもって行動してゆくけれども、それが全く期待はずれの結果に終わって、自分の努力が空しかったことを感じる場合にうまれるアイロニーである。Northrop Frye は ‘The basis of irony is the independence of the way things are from the way we want them to be; in tragedy a heroic effort against this independence is made and fails’<sup>2)</sup> といったが、シェイクスピア劇に例をとるならば、「闇の手先」といわれる魔女達にもてあそばれるマクベスの運命に、この種のアイロニーが感じられる。

次は「外観と実態の食い違い」であるが、我々は、劇の人物が自分のおかれている危険な状況を知らないで、得意になっているのをみるとアイロニーを感じる。これは dramatic irony と呼ばれるもので、その典型的な例は、『リチャード三世』における党派的で軽薄な Hastings の運命である。彼は

敵視する王妃の一族の没落をきき興奮して喜ぶが、同じ運命が彼の身に迫っていることを観客は知っているのである。またシェイクスピア喜劇のヒロイン達が、変装によって欺いて作り出す状況のアイロニーも、この型のアイロニーとして重要である。ドラマティック・アイロニーが、G.G. Sedgewick のように、「劇の人物が自分のおかれた状況を知らないで行動するのをみて、観客が感じる矛盾の意識」<sup>3)</sup>であるならば、そのような効果が全然感じられないような劇は少ないであろう。ただその効果をうみだすために大切なことは、観客にその矛盾がわかるように、劇作家は前以て彼等に知識を与えておかねばならないという点である。その上、欺かれる者に、D.C Muecke のいう「自信にみちが迂闊さ」(confident unawareness)<sup>4)</sup>という要素があれば、アイロニーの効果はさらに完全なものとなるのである。

以上、これまで確認されてきたアイロニーの型を、シェイクスピア劇の中で考察してみたわけであるが、追求されなければならないのは、劇の中に部分的にみられるアイロニーの効果ではなく、個々の劇においてアイロニーが、その作品全体の本質とどのように関わっているかという問題である。別な言い方をすれば、そのアイロニーに作者の批判が含まれているかどうかということである。もっともシェイクスピアの作品によっては、アイロニーの効果それ自体が目的であって、それ以上の意味はない場合もあるが、アイロニーは、その辛らつな特性から、作者によってしばしば諷刺の手段として用いられ、劇の問題を解く鍵を与えているように思われるのである。性格を心理的に追求する批評の立場が致命的な欠陥を暴露するのは、アイロニーがシェイクスピアの批判をあらわしモラルの主題と結びついている場合である。その場合、アイロニーをうみだす人物を心理的に追求すれば、我々は立って眺めるべき安定した基盤を失うことになり、またアイロニーの対象となる人物の心の中に入ってゆけば、必要な距離を保てなくなるので、いずれの場合も、アイロニーに反応することは不可能となる。そのために、劇の解釈は、作者が意図する立場と全く逆な方向に進む危険性があるのである。

そのよい例が『ヘンリー四世』におけるハル王子の解釈である。批評家達

は、これまでハルは墮落していると考えて、彼の悪い仲間であるフォールスタッフとの関係を尺度に彼が更生してゆく過程を辿ってきたが、拙著 'Shakespeare's *Henry IV and Henry V*——Hal's Heroic Character and the Sun-Cloud Theme' (Kyoto, 1973) で私が指摘したように、シェイクスピアがハルの筋に意図したものは、英雄の偉大さを世界が知らない面白さであり、これまでの解釈は、作者の意図と全く逆であったのである。問題は、王子の第一独白 (Pt.1, I.ii. 188-210) の扱い方である。その独白の中で王子が悪い仲間と付合う目的について述べ、醜い雲から出る太陽がその雲のあるために輝きを増し人目を引くように、将来における自分の改心をひきたたすため彼等と付合うというとき、それが彼の意図や性格をあらわしていることは言うまでもないが、<sup>9)</sup> A.C. ブラッドレーが考えたように、彼は仲間を裏切ろうとする嫌な性格として描かれているのではない。ハルは最初から大きな器で、シェイクスピア自身にとっても彼は太陽であり、観客は、将来彼が雲からあらわれて世界を驚かすことを期待するように要求されているのである。これは王子の性格に発展のないことを意味する。ハルは成長するのではなく、彼の意図や偉大さを知らないほかの者達の方にアイロニーがあるのである。これまで批評家達がこのアイロニーに反応することができなかったのは、彼等が王子の成長を心理的に追求してきたからである。シェイクスピアの大きな謎として、ジョンソン博士の時代から激しく議論されてきたこの劇における構成の問題も、私の立場からすれば、実際には存在しなかったことになる。これは『第一部』で父と完全に和解した筈の王子が何故『第二部』のはじめで再び悪い仲間のところへ戻るのか、『第二部』は『第一部』の繰り返しではないかという問題であるが、私にいわすれば、彼が悪い仲間のところへ戻るから『第二部』が続くのである。もし『第一部』の終わりで王子がフォールスタッフ達と別れれば、これは太陽が雲から出て了うことになり、それこそ『第二部』が続かなくなるのである。Shakespeare Survey 38 (Cambridge U.P. 1985) は、シェイクスピア史劇の研究に関する30年に一度の総括の中で、私の立場に大きな注目を拂っているが、この劇の構成の問題は、現代の

誤った批評が勝手に創り出したものであった。<sup>6)</sup>

劇のジャンルによって、アイロニーの効果や意味が異なってくる。シェイクスピアの喜劇においては、恋の不思議な力によって動かされる人物が、さまざまなシチュエーションにおいてうみだすアイロニーの効果がしばしば追求されているが、このような場合、劇作家は離れたところからアクションを楽しんでいるのであって、性格の中に深く入ってゆけば、笑いを見失うことになる。喜劇では一般に男性よりも女性の方が主導的な役を演ずる。彼女達がしばしば用いる変装は、appearanceとrealityの矛盾からアイロニーをうみだす基本的な技法であって、それは恋の不思議な作用とあいまって、大きな喜劇的效果をうみだすのである。たとえば、『ヴェローナの二紳士』におけるJulia、『お気に召すままに』におけるアーデンの森の中のRosalind、また『十二夜』におけるViolaがその典型的な例であって、変装している彼女達と、その事実を知らない彼女たちの恋人やほかの人物達の応対の中に、観客はアイロニーを感じてたのしむことができる。

だがシェイクスピア喜劇で変装の技法が用いられる場合、変装した者の正体を知らない他の人物にうみだされるアイロニーの外に、変装者自身に対するより強いアイロニーが作者によってしばしば準備されていることを忘れてはならない。それは、変装を利用して他の人物を欺いてきた者が、その変装のために自由がきかないで、精神的苦痛を甘受しなければならないというアイロニーである。そのもっともよい例は、自分が変装しているのをよいことに、恋人OrlandoをからかっているRosalindが、彼の兄にオーランドの血のついたハンカチをみせられて卒倒する場面である。この場合、彼女がその卒倒は芝居であったと主張するので、ますます滑稽に感じられるのであるが、初期の喜劇『ヴェローナの二紳士』で、ValentineがSilviaを放棄してProteusにゆずるという言葉を引きいて、変装したJuliaが卒倒するときにも、シェイクスピアは同じようなアイロニーの効果を図ったのではなかろうか。

シェイクスピアの喜劇は、romanticな愛にせよ、sexualなものにせよ、愛を主題の中心にもつものが多いが、『ヴェニスの商人』のように、金に対

する人間の欲望を諷刺したものがあある。ユダヤ人の高利貸し Shylock は、人肉裁判で高潔な人物 Antonio の命をねらうところからみて、欲のために人間性を失った残酷な悪党に描かれているといえる。だがそのような解釈に対して、現代の人道主義の立場から、シャイロックを虐げられたユダヤ民族の代弁者として捉える批評の流れが、今も根強く残っているのである。このような批評家達によれば、慈悲を標榜するキリスト教徒達の Jew に対する「非情」な扱いにアイロニーがあるというのであるが、作者がそのような効果を意図しているとは思われない。彼等が人道主義の立場から最も重視している 'Hath not a Jew eyes?...' (*The Merchant of Venice*, III. i .49) にはじまるシャイロックの有名な言葉は、ユダヤ人とキリスト教徒が人間として同じである点を沢山ならべることによって、アントーニオに対する自分の復讐の正当性を強調しようとする一種のレトリックであって、自分の属する民族の公平な扱いを要求しているのではないのである。しかもこの言葉を含んだ三幕一場は、作者のシャイロックに対する諷刺が最も強く感じられる場面なのである。シェイクスピアは最も客観的な作家といわれるだけに、想像でもって自分を投入することによって、シャイロックが生き生きと描かれているところがある。だが作者がこの劇において彼を諷刺の対象として扱っていることは明らかであって、我々は彼の言葉をコンテキストから切り離して特別な意味を付加するのではなく、彼の運命をアイロニーにみちた諷刺的な構成の中において捉える批評態度が必要なのである。

悲劇のアイロニーについて言えば、喜劇の場合の逆になる。主要人物の魂の苦悩が描かれているこのジャンルにおいては、我々は離れて眺めるのではなく、苦しんでいる人物達の心の中に入ってゆくことを要求されるので、アイロニーは弱められる。ドイツの A.W. シュレーゲルが、アイロニーを提示するものと、悲劇的なものとを関連づけることができなかったように、<sup>7)</sup> 私でもアイロニーが悲劇性を強めるものとは考えにくいからである。

『オセロ』では、悪魔的なアイロニストであるイアーゴの悪にくみにかかって、オセロは嫉妬から、美しく貞節なデズデモーナを殺害する。イアー

ゴーの正体を知っている観客は、彼を信じて疑わないオセロにアイロニーを感じるが、彼の高貴な性格とデズデモーナの慈愛にみちた性格のために、彼等に同情し、イアーゴーを憎むのである。このように『オセロ』の観客は、矛盾した二つの姿勢を強いられるために、この劇のアイロニーは、殆ど堪えられないものになってくる。

シェイクスピアの悲劇で、『オセロ』と共に最もそのアイロニーが注目されるのは、『マクベス』である。だがこの二つの劇のアイロニーは、対照的な性格をもっている。『オセロ』のアイロニーは、アイロニストがうみだすドラマティック・アイロニーであるのに対して、『マクベス』の場合は、運命のアイロニーあるいは事件のアイロニーと呼ばれるのがふさわしい。この劇では、魔女達がマクベスの運命を予言し、彼は彼女達に翻弄されることになるのであるが、観客が意識 (awareness) において彼よりあまり優っているわけではない。たとえば Birnam の森に関する予言にしても、その予言の本当の意味を観客が知るのは、マクベスと殆ど同時であって、彼等はその時はじめて振り返って、欺かれた彼にアイロニーを感じるのである。『マクベス』のアイロニーを論ずる場合、特に忘れてはならないのは、劇の大部分にわたって、マクベスの内的葛藤に我々の心が奪われるという点であろう。

それではシェイクスピアの史劇についてはどうであろうか。実は、アイロニーの効果や役割が最も明確に作者の姿勢や意図をあらわしているのは、このジャンルなのである。そこでは、王位をめぐる英国の王侯貴族の争いを天の上からみている神の存在が意識され、王位の篡奪、個人的な復讐や殺害、そして偽誓の罪に対して天罰が下されるのである。その場合、アイロニーはしばしば神の復讐の効果となって、モラルの主題と結びついている。

シェイクスピア劇の中で最もアイロニーの濃い作品とおもわれる『リチャード三世』を例にとってみよう。ここでは主人公リチャードが劇の冒頭の独白で、王位篡奪の陰謀とその手順を観客に伝え、以後次々と他人を欺いてゆくので、この劇はドラマティック・アイロニーの連続といえる。その上、彼の性格が非常にアイロニカルに描かれていて、皮肉な注釈をもって彼に欺かれ

た者達を笑うので、彼等が阿呆にみえてくる。そのためある批評家達は、彼が悪党であることは既定の事実として、彼のヒューモリストとしての性格をたのしもうとするのである。だがこの劇のアイロニーは、リチャードの性格の中に限定されてはならない。彼に殺される者達の多くは過去に罪を犯して、死ぬ前にみな、因果応報のモラルを意識してアイロニーを感じるのであり、アイロニーは罪に対する復讐の主題に伴いながら、この劇のモラルを強調しているのである。リチャードが王位をねらう野心家であると共に、「神の鞭」であることは一般に認められているが、この劇のアイロニーは神の復讐の効果なのであって、シェイクスピアはこの人物にそのような役割を意図して、彼にアイロニカルな性格を与えたのである。これは、劇の後半において神の復讐をうけるリチャードからアイロニーが逃げてゆき、彼の方へ、アイロニーの焦点が移行してゆく事実によって更に裏付けられるであろう。

次は『ジョン王』であるが、この劇も非常にアイロニーの濃い作品であって、『リチャード三世』におけるアイロニーの意味と役割が、この劇の解釈に大きな手掛りを与えるように思われる。半ばコーラスの役を演ずる庶子フィリップは、偽誓と変節を繰り返す卑劣な政治家達を諷刺し、篡奪者ジョンをはじめとして彼等がたどるアイロニカルな運命には、神の意志がはたらいている。

この劇については、殆ど同じ内容をもつ二部作からなる作者未詳の *The Troublesome Reign of King John* (以下 *TR* と略す) という劇があった。この二つの劇のどちらがどちらを基にして書かれたかということについて、批評界で長い間論争が続いているが、この問題を解くためには、主題とアイロニーの面から、両者の相違を考えてみる必要がある。『ジョン王』が *TR* と最も違うところは、後者がジョンをローマ法王やフランスを敵として戦った国民の英雄として捉え、愛国の主題が中心であるのに対して、シェイクスピア劇では、彼を篡奪者として諷刺の対象にしているだけでなく、便宜主義の主題が愛国の主題と並ぶ重要な主題として追求されている点である。先王の庶子フィリップについても、*TR* では、素朴な愛国主義者として描かれて



いるのに対して、シェイクスピア劇においては、前半で政治家達の便宜主義を諷刺するひょうきんな性格に描かれていて、劇の後半における彼の愛国主義者の性格とうまく調和しないのである。ある批評家達は、この性格の変化の中に庶子の政治家としての成長をみて、政治の世界における便宜主義の重要性がこの劇で強調されていると考えるが、それは作者の意図と逆であろう。このことは、劇全体にわたって便宜主義が諷刺され、便宜主義のために危殆にひんした国家を、便宜主義の影響を受けない庶子が救おうとするこの劇の筋から明らかである。『ジョン王』で指摘されるいろいろな矛盾は、TRに潜在する便宜主義の主題とアイロニーをシェイクスピアが強調することによって生まれたものであって、庶子の性格の不統一も、コーラスとしての彼の性格に、便宜主義の主題と愛国主義の主題が矛盾するように反映されているのにすぎないように思われる。彼のようなコーラス的な人物に対しても、心理的にその性格の発展を追求してゆく批評態度が、この劇の解釈を混乱させているのである。私は拙論 'Commodity Theme and Irony in *King John*' (1987) でこのような立場を主張したが、世界の多くの批評家<sup>8)</sup>や *Shakespeare Survey 41* (Cambridge U.P. 1989) が注目してくれた。

復讐のアイロニーは、すでにふれた『ヘンリー四世』においても同じように感じられる。リチャード二世の王位を奪って殺したヘンリーの治世は苦難にみちており、王の威厳を保とうとする篡奪者に対するパロディをフォールスタッフの行動の中にみることができる。ヘンリーは、ハル王子の墮落した外観に自己の罪に対する神の復讐をみるが、王子は最初から大きな器で、将来における自己の「改心」を引立たすために悪い仲間と付合っているのであり、彼の偉大さと意図を知らないヘンリーや他の者達にアイロニーがあるのである。『ヘンリー四世』が篡奪者や篡奪をたすけた者達の世界であることを考えれば、このアイロニーは、神による復讐のアイロニーといえるであろう。問題は、ハルの性格に発展がないのに、批評家達が彼の成長を心理的に追求するため、作者の意図したアイロニーに反応することができないということである。これは彼等の立場が、作者の意図と全く逆であることを意味し、

劇全体の解釈に大きな歪みをもたらした。だがこのような誤りは、現代におけるシェイクスピア批評の体質に原因があるだけに、それは当然他のジャンルの作品の解釈にもみられるのである。

例えば、すでに触れた初期の喜劇『ヴェローナの二紳士』である。その劇の最後の場で、ヴァレンティンは、自分の恋人シルヴィアを、彼女を手ごめにしようとした彼の親友プロウテウスに譲ろうとし、変装して自分の許婚プロウテウスに仕えながら彼の浮気を看視してきたジューリアが、それをきいて卒倒するのである。この場合、恋よりも友情を重んじる中世的なモラルの立場が、ヴァレンティンをとうして強調されているのか、それともプロウテウスがおよそ友情に価する人物ではないので、そのモラルに対する諷刺が作者によって意図されているのか。またジューリアの卒倒も、ヴァレンティンの不合理な態度に抗議する彼女の意識的な行動なのか、それとも自分の恋人を永久に失うという悲しみのショックによるものか。そういった問題を中心に批評家達が対立してきたが、納得のゆく結論を得ないまま、今日に至っているのである。だが私がこの問題を扱ってみて驚いたことは、ジューリアの卒倒に含まれたアイロニーに注目する批評家がこれまでになかったことである。変装という技法によってうみだされるアイロニーが、この喜劇の醍醐味であることは明らかであろう。ジューリアの変装の事実を知らない他の人物達に対する彼女のしばしば *aside* を用いてなされる皮肉な注釈や機知に富んだ対応は、観客を笑わせながら、たのしませてくれる。だが変装によって他人を欺いてきた彼女のような人物が、突然ショックをうけて卒倒するとき、アイロニーは2倍の強さになって自分にはね返ってくるのである。このアイロニーに批評家達が反応できなかったのは、ジューリアの性格に興味をもったからである。しかしヴァレンティンのシルヴィア放棄の言葉に、二人の女性に対する作者のアイロニーが意図されたとするならば、この劇の解釈は大きく変わってくるであろう。その場合、ヴァレンティンに対する作者の諷刺はあり得ないからである。この劇のはじめでは、人間の意志の力を越える恋の魔力が強調されている。だが友人の恋人に横恋慕して、友や許婚を裏

切るプロウテュースの偽誓的な態度は許されない。だから彼は、シルヴィアとジューリアに愚弄され諷刺されて当然であるが、それがあまり長く続くので、この劇のはじめの方で恋の魔力を強調したシェイクスピアが、アイロニーのバランスをとるため、ヴァレンティンのシルヴィア放棄の言葉をとうして、女性達にちょっとショックを与えたのではなかろうか。この高い友情の言葉は、ジューリアを卒倒させることによって、恋の行き違いから生じたこの劇の混乱を、一気に解決する効果をもつのである。この劇の問題は、もっと喜劇の技巧の面から考察されなければならなかったのである。

以上のような新しい立場にたって最近書かれた拙論 ‘Valentine’s Renunciation of Silvia and Julia’s Swoon: A Balance of Irony in *The Two Gentlemen of Verona*’ には、世界の大きな反響があった。<sup>9)</sup> 私は、『ヘンリー四世』や『ジョン王』の場合を考えあわせながら、シェイクスピアの正しい解釈のために、アイロニーの研究が如何に重要であるかを今更ながら痛感するのである。

〔注〕

- 1) J.A. Cuddon, *A Dictionary of Literary Terms* (Penguin Books, 1977), p.338.
- 2) Northrop Frye, *Fools of Time*, (University of Toronto Press, 1967), p.6.
- 3) G.G. Sedgewick, *Of Irony Especially in Drama*, (University of Toronto Press, 1935), p.49.
- 4) D.C. Muecke, *Irony*, (Methuen, 1970), p.25.
- 5) John Dover Wilson が、ブラッドレーの批判から王子を救うために、この独白を彼の意図や性格と関係のない Prologue のようなものと解釈したことが、批評界を誤らせる大きな原因となった。(See J.D. Wilson, *The Fortunes of Falstaff*, Cambridge U.P., 1943), p.41.
- 6) 1964 年のシェイクスピア生誕 400 年祭の年に、奇しくもオックスフォードに留学していた私は、『ヘンリー四世』におけるイメジャリーの研究をしていたとき、ハル王子が全く新しい性格として躍動してきたのである。それは従来の解釈と逆な立場であって、シェイクスピアは王子の筋に、英雄の偉大さを世界が知らない面白さを意図しているというものである。私はこの問題の権威 Harold

Jenkins に対抗するため、テューターに頼んで出版社を世話して貰ったが、いよいよ契約する前、資金がなくなり、その計画を断念した。そして英文で書いた小さな本を出したのは、それから9年後であった。それに対する世界の反響については、拙著『シェイクスピアの歴史劇』（山口書店、昭和56年発行）に書いたが、シェイクスピア演劇の研究で有名なケインブリッジの Richard David から来た手紙の一部分を引用しよう。

I am ashamed that, like so many others who have written on Shakespeare's "Lancastrian series", I have failed to notice, or at least to take at its face value, what Hal says in his first soliloquy, and have therefore created for myself a host of problems about the plays — problems that do not really exist. You have seized on what should have been obvious — and this example again shows that to see the obvious requires *real* insight.

この批評家は、三年後に出した *Shakespeare in the Theatre* (Cambridge U.P., 1978) において、ロイヤル・シェイクスピアの上演に例をとりながら、演劇史上からみた拙著の意義を二頁にわたって強調している (see *Ibid*, pp. 190f.).

もう一つ、私を感動させたものとして、いまオックスフォード大学の英文学教授でシェイクスピア学者である Emrys Jones からの手紙を紹介しておこう。

Magdalen College, Oxford.

21 December 1975

Dear Professor Aoki,

Some time ago you were so kind as to send me a copy of your book *Shakespeare's Henry IV and Henry V*. I was at the time very much immersed in other pressing matters, and I both overlooked the book itself and completely forgot to thank you for it. Please forgive me for this lapse; I am extremely sorry not to have written to you before.

I have now read your book, and wish to say how much I enjoyed it and how completely convincing I have found your argument. I have for a long time been dissatisfied with the Dover Wilson argument about the 'education' of Prince Hal, but I must confess I have never bothered to think out exactly why it needed demolishing. You have now saved me — and others — the trouble of doing so. But you have also made much clearer than before the entire strategy of these plays as far as Prince Hal is concerned. I shall certainly recommend it to my colleagues and pupils.

It was very generous of you to send your book to a complete stranger. I am most grateful to have been singled out.

Best Wishes.

Yours sincerely

Emrys Jones

- 7) See D.C. Muecke, *op.cit.*, p.19.

dramatic irony と tragic irony を同じ意味にとる傾向があるが、これは古代ギリシャ悲劇の影響である。この型のアイロニーは、そのコミカルな効果を考えれば、本質的には、喜劇にふさわしいと思われる。

- 8) 『ジョン王』は、ほぼ同じ内容をもつ ‘The Troublesome Reign of King John’ という作者未詳の劇との関係が問題であるが、後者に潜在する便宜主義の主題とアイロニーをシェイクスピアが強調することによって劇の統一を乱している点に着目し、その面から『ジョン王』をめぐる多くの問題を解決しようとした。大きな反響があったので、海外の有名なシェイクスピア学者からの手紙を載せておこう。

- ① もと Kent にいたフォークス教授はいまカリフォルニア大学にいる。

University of California  
Los Angeles 8 May 1987

Dear Dr Aoki,

Many thanks indeed for sending me an offprint of your interesting essay on *King John*. I like your general argument about its relation to the *Troublesome Reign*, and emphasis on Shakespeare's irony, which is one of the most powerful of the dramatic effects he deploys. Incidentally, one of my colleagues here, A.R. Braunmuller, is editing *King John* for the Oxford series, and I have no doubt he will be interested in what you have written – I will make sure he sees the copy I have.

Yours sincerely

R.A. Foakes

- ② ミュア教授は、現代の最も偉大なシェイクスピア学者で、世界シェイクスピア学会の会長もやっていた。英国では教授の生誕 80 年を祝って、記念行事が行われたようである。

Liverpool University  
12 May

Dear Mr Aoki,

Forgive me for not writing before. I have just been celebrating

my 80th birthday and I have had to write more than a hundred letters of thanks to people who came, or wrote, or contributed an article.

I liked your article on *King John*: it seems to be a very sane treatment of what I have always found to be a puzzling play. Thank you for sending me a copy.

Yours sincerely,  
*Kenneth Muir*

- ③ ジェンキンズ教授は、「アーデン・シェイクスピア」の general editor として有名であり、『ハムレット』のアーデン・エディタでもある。

22 North Crescent, London N3 3LL  
11 June 1989

Dear Professor Aoki,

I write to thank you for your courtesy and kindness in sending me the offprint of your interesting article on *King John*, which has been forwarded to me from Edinburgh, where, since my retirement, I no longer am. The relationship between Shakespeare's *King John* and *The Troublesome Reign* has always been a puzzle, and, as my great friend Erast Honigmann knows, I have never quite been able to accept his view that *The Troublesome Reign* was a derivative play rather than a source. You of course do not directly argue the matter but accept as a premise that *The Troublesome Reign* is a source. The comparison is then very interesting as suggesting some of the ways in which Shakespeare modifies the spirit in which the events are regarded, and I think you are persuasive in maintaining that this is the cause of a dual, and even a conflicting, approach. If Shakespeare is reworking the older play, this also explains the compression of the later acts; he has to compress now to get all the material in. Your comparison between *King John* and *Richard III* is also interesting...

With thanks again and best wishes,

Yours sincerely,  
*Harold Jenkins*

- ④ イェール大学のウェイス教授は、『The Oxford Shakespeare』では、*Titus Andronicus* などを担当するが、『ジョン王』の研究家でもある。

Yale University  
Department of English  
June 11, 1987

Dear Mr. Aoki,

It was very good of you to send me an offprint of your essay on *King John*, a play which has interested me for many years. Your emphasis on irony seems to me exactly right, and the comparison with *Richard III*, which had not occurred to me, is very illuminating. *King John* is indeed a difficult play to see as a unified whole. You may well be right that Shakespeare changed his mind. Or, in rewriting the more patriotic play, he let his ironic view predominate in more and more of the play, but still wanted to end on a patriotic note. A few years ago I suggested another sort of explanation based on the great success the play had on the stage in the 18th and 19th centuries. My essay is in *Shakespeare Quarterly* 29 (1978). Perhaps it would interest you. I'm sorry I no longer have an offprint.

I'm enclosing something more recent of mine.

With all best wishes.  
Eugene M. Waith

- ⑤ サリンガー教授は、*Shakespeare and the Traditions of Comedy* (Cambridge U.P., 1974) で知られている。

Trinity College  
Cambridge CB2 1TQ  
17 May 1987

Dear Professor Aoki,

It was very good of you to send me a copy of your article on *King John*. It seems to me a very thoughtful and interesting study, thoroughly argued.

I was struck by your passing reference to *Macbeth* on page 92. It seems to me there is another sign of thought that led on to *Macbeth* in one of John's dying speeches (V.vii.28-34), where he feels he is 'crumbl [ing] up to dust', and compares himself to 'a scribbled form' on a parchment shrivelling in the fire.

The motivation of the noblemen who turn against John and then come back is obscure in some ways, it seems to me — or rather, it is not quite clear how we are supposed to judge them. But although the final message of the play stresses patriotism and national unity,

and hence, loyalty to the king, I think the play has also shown clearly enough that much of the responsibility for the noblemen's defection lies with John himself. It seems to me that the theme of legitimacy (personal and dynastic) interlocks with the theme of commodity in the first half of the play, and perhaps that helps to explain Shakespeare's treatment of John. But personally I'm still rather puzzled by the effect of the play, considered as a whole.

Are you thinking of coming to England at all soon? If so, perhaps you could get in touch with me, and we could have an opportunity to take this discussion further.

Best Wishes, meanwhile, and thank you once again,

Yours sincerely,  
Leo Salingar

- ⑥ ベヴィントン教授は, 'The Oxford Shakespeare' で『ヘンリー四世』を担当しており, 'The Bantam Shakespeare' のエディタである。

The University of Chicago  
Department of English  
June 13 1987

Dear Professor Aoki,

I am honored and grateful to have your essay on "Commodity Theme and Irony in King John". You do an excellent job of studying the problem in relation to the connection between Sh's play and the *Troublesome Reign*. I too believe as you do that Honigmann's argument is not convincing, much as I admire him. What you do adds richly to the sense of how the plays are to be seen in relation to one another. I like what you say about the pivotal importance of the Bastard's role as national hero or character viewed in an ironic stance. Thank you for thinking to send me a copy.

With my warmest wishes and admiration,

Sincerely,  
David Bevington

- ⑦ フライ教授は今世紀最大の文芸批評家といわれているが, 最近彼のシェイクスピア論 Northrop Frye on Shakespeare (Yale University Press, ed by Robert Sandler, 1986) がでた。



University of Toronto  
Massey College  
July 18, 1987

Dear Professor Aoki,

Thank you very much for your offprint on *King John*. The relation of a play to the *Troublesome Reign* is of course a very complex one, but your case seems to be quite fairly presented and it has not underplayed the originality of the Shakespeare play.

With best wishes.

Yours sincerely,  
Northrop Frye

- 9) 私はすでに一年前、この論文とほぼ同じ内容のものを、「ヴァレンティンのシルヴィア放棄とジュリアの卒倒——『ヴェローナの二紳士』の新しい読み方」と題して、日本語で書き、桃山学院大学総合研究所発行の「英米評論」第7号(1993)に発表していたのである。だが、扱った問題がシェイクスピアの謎と呼ばれる未解決の重要な問題であるだけに、私の新しい解釈を世界がどのように評価するか知りたいという欲望は抑えがたく、再びその論文を英語になおして、「英米評論」第8号に発表したわけである。大きな反響があったので、注目すべきものを到着の順に載せておこう。

- ① チャンピオン教授は、*The Evolution of Shakespeare's Comedy* (Harvard U.P., 1970) の著者で、シェイクスピア喜劇の研究で知られている。

North Carolina State University  
Department of English  
March 22, 1994

Dear Professor Aoki:

I very much appreciate the offprint of your recent article on *The Two Gentlemen of Verona*. You argue convincingly for the ironic effects of Julia's fainting, insisting quite properly, I believe, that focus upon the comic technique will provide the best method for stage presentation of this otherwise problematic moment in the play.

Again, I enjoyed reading your article, and I wish you continued success in your Shakespeare research.

Yours sincerely,  
Larry S. Champion

- ② ジェキンズ教授(1909-)は、「アーデン・シェイクスピア」の general

editor として有名であり、学界の第一人者である。私は『ヘンリー四世』における構成の問題を扱って以来、教授には深い因縁のようなものを感じている。

22 North Crescent, London N3 3LL

28 March 1944

Dear Professor Aoki,

Thank you for so kindly sending me the offprint of your article on *The Two Gentlemen of Verona*, which I have read with great interest. Although I might question one or two things here and there (I think the irony in Julia's speeches is more poignant than laughable), I have not the slightest doubt that you are fundamentally right. That is to say that I agree with you that the ending of the play, with Valentine's surrender of Silvia and Julia's swoon, is to be taken quite seriously and that critics who suppose Shakespeare to be mocking the lovers here do not understand the play. There has been too much of what you call 'psychological realism', and those who cling to the traditions of courtly and romantic love cannot accept that the lover would or should sacrifice his beloved. But I think you would agree that his doing so does not show his love to be shallow; but rather, it is because his love is deep that his gift of the beloved shows the perfection of his friendship. Yet of course the play is not, as some have maintained, about love *versus* friendship, with friendship triumphing over love. It is about *two* gentlemen of whom one, aptly called Proteus, is changeable both in love and in friendship, while the other, Valentine, is constant in both. The ending of the play, after Proteus's necessary penitence, celebrates constancy and 'the harmony between love and friendship' which you so well bring out in your apt quotation of the concluding lines. Of course it would be awkward if, as too many critics do, we asked what must Silvia think where her lover offers to give her up, but, as you excellently show, one effect of Julia's swoon is to divert attention to her and away from Silvia, so that the awkward question is never asked.

I used to enjoy taking this undervalued play with my students and have much enjoyed your discussion of some of its problems.

Yours sincerely

Harold Jenkins

③ エヴァンズ教授は、'The Riverside Shakespeare' の編さんで知られてい

るハーヴァード大学の有名なシェイクスピア学者である。

Harvard University  
Cambridge, Mass. 02138  
29 March 1994

Dear Professor Aoki,

It was good to hear from you and it was very kind of you to send me an offprint of your article on *Two Gentlemen* — a difficult and on the whole an unsatisfactory play. Your approach to the problem of Valentine and Julia in the last scene adds a new dimension to the way we may look at the play. I enjoyed reading the article very much.

With all best wishes to you and for your future work on Shakespeare.

Yours sincerely  
G. Blakemore Evans

- ④ トロント大学のレガット教授は、*Shakespeare's Comedy of Love* (Methuen, 1974) の著者として有名であり、シェイクスピア喜劇の権威である。

University College  
University of Toronto  
March 31 1994

Dear Professor Aoki,

Thank you very much for your kindness in sending me your article on *The Two Gentlemen of Verona*. I find it particularly valuable in the way it emphasizes the importance of irony in the play, and shows how many different ways that irony is used. This is one of Shakespeare's most difficult plays, and you have some very interesting suggestions to help us understand it.

Yours sincerely  
Alexander Leggatt

- ⑤ ミュア教授(1907-)は、かつて世界シェイクスピア学会の会長をやっていたことがあり、学界の大御所といった存在である。たくさんのシェイクスピアに関する著書や注釈書があり、長い間、*Shakespeare Survey* (Cambridge U.P.) の編集をやったことがある。その解釈は、妥当なものが多く、いつも私は彼に尊敬をはらっていたが、『ヴェローナの二紳士』に関しては別であっ

た。彼の立場が、この劇の理解を妨げている大きな原因と思われたからである。それ故、拙論では、彼の解釈と真っ向から対立し、それを否定するようにつとめた。

6 Chetwynd Road  
Oxton Birkenhead

Dear Professor Aoki,

Many thanks for your article on *T.G.* I thought it very perceptive. My only doubt is due to a feeling that during the gap of some 33 years between performance and publication a lot can happen to a text. I suspect that the original was written at the time of the sonnets and the ideology had become old-fashioned.

Incidentally, it is the only one of Shakespeare's plays of which I have never seen a satisfactory production.

Yours sincerely  
Kenneth Muir

- ⑥ ウェイス氏は、イエール大学の名誉教授で、オックスフォード版のシェイクスピアで、*Titus Andronicus* と *The Two Noble Kinsmen* を編集した。かつて教授は、『ジョン王』に関する私の新しい立場を高く評価してくれたことを思い出す。

Yale University  
Department of English  
April 6, 1994

Dear Keiji Aoki,

I have very much enjoyed reading your article on *Two Gentlemen of Verona*, and I'm much obliged to you for sending it to me. Your sensitive awareness of the ironies inherent in the relationships between various characters in the play makes your analysis of the scene you discuss persuasive. I, too, am inclined to take Valentine seriously even in what seems to us like his outrageous gesture of offering Silvia to Proteus, because I believe that the ideal of friendship meant much more to Renaissance audiences than to most contemporaries (even though "male bonding" is quite prominent in a number of movies). I spent some time in the writing of my introduction to the Oxford edition of *Two Noble Kinsmen* referring, as you do, to the famous story of Titus and Gisippus. Also, I agree that shock is quite sufficient to explain Julia's swoon. For one thing, it would be

very difficult for an actress (or actor) to convey to an audience the idea that the swoon was a deliberate trick. As you see, I have followed your argument with interest and sympathy.

I apologize for my ignorance of your position. Do you teach Shakespeare? Sometime, if you have time to write me, I'd be glad to know more about what you do. As you probably know, I have been retired now for over ten years.

Thank you again for your offprint.

Sincerely,  
Eugene M. Waith

- ⑦ ハップグッド教授は、*Shakespeare The Theatre-Poet* (Clarendon Press Oxford, 1988) の著者で、シェイクスピア劇の舞台における演出に興味をもっている。

University of New Hampshire  
Department of English  
2 May 1994

Dear Professor Aoki:

Thanks for "Valentine's Renunciation..." It provides a fresh and plausible way of looking at the finale of *Two Gentlemen of Verona*, and I've enjoyed thinking about the issues it raises. I can well imagine a vulnerable Julia who genuinely faints and mistakes the rings, with the ironic implications you suggest. (I'd add that some of the shocking reversal of expectations she experiences extends to the audience: we too are taken aback at Valentine's renunciation and Julia's faint may be seen as a projection of our dismay.) On the other hand, I can imagine a more self-possessed Julia who feigns both the swoon and the mistake about the rings. After all, when it comes to the point, it is she who chooses to reveal her identity. Or some combination of the two is possible. Perhaps Julia could genuinely faint, but then recover enough to decide that it was time for it all to come out and only pretend to mistake the tale-tale rings. Everything would turn on when a given Julia made the decision to reveal herself, and that would depend on the way her whole role is conceived.

These days, I'm less inclined to look in a Shakespearian text for a definitive reading and more inclined to explore a set of options among which an interpreter (whether a performer or reader) may choose. Although I'm not convinced, as you are, that your reading

is *the* one, I do welcome it as an enlargement of the range of choices that the passage affords its interpreters. There is a comparable functional ambiguity about the truth or falsity of Lady Macbeth's "faint." Still more intriguing is silent Silvia. What must she be thinking to be twice cast aside by her "ardent" suitors!

Have you come across Bertrand Evans' book on Shakespeare's comedies? From what you write I think you'd find congenial his analyses of "discrepant awarenesses."

With all good wishes.

Sincerely,  
Robert Hapgood

- ⑧ フォークス教授は *Shakespeare: The Dark Comedies to the Last Plays — from Satire to Celebration* (London Routledge & Kegan Paul, 1971) の著者であるが、最近 *Hamlet versus Lear* (Cambridge U.P.1993) という本を出した。彼は、『ヘンリー四世』に関する私の新しい解釈に最初に反応してきた批評家として、私には忘れられない存在である。

University of California  
Los Angeles  
26 June 1994

Dear Professor Aoki:

I'm most grateful to you for sending me an offprint of your excellent essay on *Two Gentlemen of Verona* (I have been at the Folger Library in Washington, where it followed me). You are quite right to emphasise comic convention and technique in the play — as the Royal Shakespeare Theatre did in their last production, in which the reversal at the end seemed a last joke rather than some inexplicable elevation of friendship above love.

I am trying to edit *King Lear* just now — a massive task, especially in the wake of debates about the two texts and the question of authorial revision.

With best Wishes,  
R.A. Foakes